

## 複式簿記：主要簿の役割に関する一考察

Double-entry Bookkeeping : A consideration on the role of the main book

石内 孔治<sup>※</sup>  
Koji Ishiuchi<sup>※</sup>

### Abstract

The purpose of this manuscript is as follows.

- I Clarify the purpose of double-entry bookkeeping and the role of books
- II Clarify the role of the journal as the main book
- III Clarify the role of the general ledger as the main book.
- IV Clarify the characteristics of calculations by the general ledger.
- V Clarify the difference between daily calculation and bookkeeping calculation.

**Keywords** : bookkeeping, main book, journal , general ledger, bookkeeping calculation

### はじめに

教育機関の複式簿記の授業において、簿記検定試験の出題内容に重点を置いた授業が主流になると、限られた簿記指導の時間配分は簿記検定試験での出題頻度の高い項目に充てられることになる。このため、たとえ企業などの経営現場において日々の経營業務の経営管理に必要な項目であったとしても、それが「出題頻度が極めて低い項目」と判断されれば、教育機関での指導時間は僅少となる。その例の一つが「主要簿と補助簿の関係」である。こうして、複式簿記の授業における「主要簿と補助簿の関係」に関する指導時間の不足が、経営現場に波及し、補助簿による日々の経營業務の経営管理が軽視されるといった問題を生じさせる。

そこで、筆者は理論と実践の融合を重視する立場に立ち、教育現場における「主要簿と補助簿の役割」に関する指導の重要性と、経営現場では特に補助簿の経営管理への活用の重要性と、に関心を抱いている。しかし、紙幅の都合があるので、本稿では「主要簿の役割」に論点を絞り論じることとしたい。補助簿については、稿をあらため他日を期することとしたい。本稿の展開は、次のとおりである。

- I 複式簿記の目的と帳簿の役割
- II 主要簿としての仕訳帳の役割と様式
- III 主要簿としての総勘定元帳の役割と様式
- IV 総勘定元帳による計算の特徴
- V 日常生活の計算と簿記の計算との違い
- むすびに

---

※日本経済大学名誉教授

## I 複式簿記の目的と帳簿の役割

### 1. 複式簿記の目的

複式簿記（以下、簿記という）の目的は2つある。その一つは損益計算（損益管理）をとおして経営管理に寄与することであり、これは損益計算書によってなされる。ここに、損益計算を通じての経営管理とは、正確な収益額と費用額との対応による経営成績の把握を意味する。損益計算に基づく適正な経営成績の把握が経営管理に直結しているのである<sup>1)</sup>。いま一つは財産計算（財産管理）をとおして経営管理に寄与することであり、これは貸借対照表によってなされる。ここに、財産計算を通じての経営管理とは、正確な資産額と負債額・純資産額との対照による財政状態の把握を意味する。財産計算に基づく適正な財政状態の把握が経営管理に直結しているのである<sup>2)</sup>。

損益計算（損益管理）による経営管理も、財産計算（財産管理）による経営管理も、「主要簿」の仕訳帳および総勘定元帳、そして、補助簿の補助記入帳および補助元帳が支えているのである。

### 2. 帳簿としての主要簿の役割

簿記の帳簿は、主要簿と補助簿で構成されている。このうち、主要簿は仕訳帳と総勘定元帳で構成されている。補助簿は補助記入帳と補助元帳で構成されている。すべての取引が記帳される重要な帳簿が主要簿であり、これに仕訳帳と総勘定元帳が該当する。仕訳帳と総勘定元帳は経営成績を表示する損益計算書と、財政状態を表示する貸借対照表とを作成する上で、重要な帳簿であるので、主要簿と言われるのである<sup>3)</sup>。

先ず、主要簿の仕訳帳の役割から取り上げることにする。

## II 主要簿としての仕訳帳の役割と様式

### 1. 主要簿として仕訳帳の役割

人々が日常生活の様子を日記帳に記録するように、経営でも日々の取引活動（営業活動ともいう）を記録する。経営では、日々の取引活動を発生順に歴史的に記録するための帳簿のことを「仕訳帳（しわけちょう）」と呼んでいる。日常生活の日記のことを英語でDIARYというが、JOURNALともいい、簿記では仕訳（しわけ）のことをJOURNALIZING、仕訳帳のことをJOURNALというのである。このように、簿記の「仕訳帳」は、人々が日常生活の様子を記録する時の日記帳に相当するのである。なお、ここに仕訳とは次のとおりである。

ビジネスで次から次に発生する取引活動を、日常生活の日記帳のように長目の文章で書き残したのでは、取引のスピードと量に対応できないのである。そこで簿記では「仕訳」と呼ばれる「日付」、「金額」、「科目」の3点を記帳することで対応しているのである。

このように、主要簿としての仕訳帳の役割は、日々の取引活動を一覧できるように、取引活動の内容を「日付」、「金額」、「科目」の3点で瞬時に仕訳として記帳すること、取引活動を発生順に経営活動の歴史的な記録として残すことである<sup>4)</sup>。その際に、簿記では図1の「取引の8要素」という仕訳

原理に基づいて日々の取引活動を、下掲の図2に示した「仕訳帳」に、一方では自分が取引相手から取得した価値の流入額を「借方要素」として記帳し、同時に、もう一方では自分が取引相手へ提供した価値の流出額を「貸方要素」として記帳する。この取引の8要素は、「取引要素」とか「取引要素の結合関係」と呼ばれている<sup>5)</sup>。これを取引の2面分解（借方と貸方）による仕訳といい、貸借分類（たいしゃくぶんるい）による仕訳ともいう。

図1 取引の8要素（仕訳原理）

借方（価値の取得）	貸方（価値の提供）
資産の増加	資産の減少
負債の減少	負債の増加
資本の減少	資本の増加
費用の発生	収益の発生

## 2. 主要簿としての仕訳帳の様式

仕訳帳の様式は図2のとおりである。いま、9月5日に久留米商会（株）が、中村茶舗（株）より玉露500,000円と煎茶100,000円を掛にて仕入れた（消費税10%は税抜き経理）とし、これを上記の取引の8要素に基づいて記帳すると、日常生活の日記帳に相当する「仕訳帳」へ記帳内容は以下のようになる。

*2		仕 訳 帳*1			9頁
*2		*3	*4	*5	*5
令和3年		摘 要	元 丁	借 方	貸 方
9	5	諸 口			
		(仕 入)	40	600,000	* A
		(仮払消費税)	28	60,000	* B
		(買掛金)	30		660,000 * C
		中村茶舗より仕入れ(税抜経理方式)			

図2の仕訳帳の様式について説明する。

- \* 1 仕訳帳 ⇒ 図2の「仕訳帳」の右側上部に、仕訳帳の頁数を記帳する。例示では9頁と記帳されている。
- \* 2 日付欄 ⇒ 図2の仕訳帳の「日付」欄には、取引の発生した発生月と発生日を記帳する。例示では9月5日と記帳されている。なお、取引の発生月は各頁の1行目だけに記帳し、以後は発生日だけを記帳する。
- \* 3 摘要欄 ⇒ 図2の仕訳帳の「摘要」欄の中央から見て左側（借方:カリカタという）と右側（貸方:カシカタという）に、取引の内容を表す科目名をカッコ書きで記帳する。ただし、図2の仕訳帳の「摘要」欄には借方や貸方という文字が印字されていない。それで、本稿では仕訳帳の「摘要」欄の中央より左側のスペースを「借方に相当する欄」と表現し、中央より右側のスペースを

「貸方に相当する欄」と表現する。

例示では、「取引の8要素」に基づいて、図2の仕訳帳の「摘要」欄の中央より左側の「借方に相当する欄」に費用の発生を意味する仕入（\*3を参照）と、資産の増加を意味する仮払消費税（\*3を参照）とが記帳されている。そして、図2の仕訳帳の「摘要」欄の中央より右側の「貸方に相当する欄」に負債の増加を意味する買掛金（\*3を参照）が記帳されている。それぞれの科目名には、カッコ書きで（仕入）、（仮払消費税）、（買掛金）と記帳されているのが確認できる。

なお、科目が2つ以上になるときは、例示のように「摘要」欄に科目名の上に諸口（しよくち）と記帳する<sup>6)</sup>（\*3を参照）。

\*4 元丁欄 ⇒ 図2の仕訳帳の「元丁」欄には、仕訳帳の借方科目と貸方科目を総勘定元帳へ書き移す際に、図3の総勘定元帳の各勘定元帳の番号または頁を記帳する。

例示の図2の仕訳帳の「元丁」欄には総勘定元帳である仕入元帳の番号である40、仮払消費税の番号である28、買掛金の番号である30が記帳されている（いずれも\*4を参照）。

\*5 借方欄・貸方欄 ⇒ 図2の仕訳帳に印字されている「借方」欄と「貸方」欄には、取引金額を記入する（\*5を参照）。例示では、図2の仕訳帳の「借方」欄に金額600,000（\*Aを参照）および60,000（\*Bを参照）と記帳されている。そして、仕訳帳の「貸方」欄に金額660,000（\*Cを参照）と記帳されている。

以上のように、図2の主要簿としての仕訳帳の役割は、図1の「取引の8要素」に基づいて、取引内容の簡潔情報である取引日、取引科目、取引金額の3点で成り立つ仕訳を、借方と貸方の二面に分類記帳して、取引の発生順に経営活動の歴史的な記録として残すことである。

### Ⅲ 主要簿としての総勘定元帳の役割と様式

#### 1. 主要簿としての総勘定元帳の役割

もう一つの総勘定元帳について述べる。簿記では、取引を記録・計算するため、帳簿に勘定科目ごとの場所を設ける。これを「勘定口座」といい<sup>7)</sup>、すべての勘定口座を集めた帳簿の総称を「総勘定元帳」または「元帳」という。以下では、総勘定元帳または元帳のいずれかの呼称を適宜に使用する<sup>8)</sup>。また、勘定科目が付された元帳、たとえば現金という勘定科目が付された元帳であれば、これを「現金元帳」と呼ぶことにする。

仕訳帳は、取引活動を発生順に「取引日」「取引金額」「取引科目」記録するためのビジネス版の日帳帳であり、これを再掲すると図2のとおりである。

*2		*3			*4		*5		9頁
令和3年		摘要			元丁	借方	貸方		
9	5	諸口							
		（仕入）			40	600,000			*A
		（仮払消費税）			28	60,000			*B
		（買掛金）			30		660,000		*C
		中村茶舗より仕入れ(税抜経理方式)							*D

このビジネス版の日記帳である仕訳帳には、取引日（\*2を参照）、取引科目（\*3を参照）、取引金額（\*5を参照）が記帳される。そして、続けて、9月5日のように「摘要」欄の末尾に「中村茶舗より仕入れ」と取引の内容を手短かに書く（\*3の\*Dを参照）。これを「小書き（こがき）」という<sup>9)</sup>。

しかし、図2の仕訳帳には金銭等の収支残高を計算する機能が備わっていないのである。そこで、上掲の図2の仕訳帳に記帳された「仕訳」の取引日（\*2を参照）、取引科目（\*3を参照）、取引金額（\*5を参照）を、計算機能を有する総勘定元帳へ書き移し、科目ごとに金銭等の残高を計算するのである。なお、「計算=勘定」するための「帳簿=元帳」であるので、勘定元帳という。

ここで留意を要するのは、仕訳帳は取引を発生順に「1冊」の日記帳に日々の出来事を記帳した歴史的な記録であること。他方、総勘定元帳は日記帳に相当する1冊の仕訳帳に記帳された「一つ一つの科目ごとに（これを一つ一つの勘定ごとにともいう）」、それぞれに独立した元帳という帳簿を開設し、科目ごとに金額が書き移されることである。

たとえば、1冊の日記帳に相当する仕訳帳の中に「現金」や「借入金」という科目名があれば、「現金については現金専用の現金元帳」が、「借入金については借入金専用の借入金元帳」が開設される。そして、「仕訳帳」において現金科目とその金額があれば、「現金元帳」を開設し、現金元帳へ現金の収入金額や現金の支出金額をまず「書き移す」のである。仕訳帳に記帳されている取引日、取引科目、取引金額を総勘定元帳へ書き移すことを「転記（てんき）」というのである<sup>10)</sup>。そして、転記後に現金の残高金額を計算しなければならない。こうして総勘定元帳の観察者は、勘定科目ごとに、たとえば「現金」「借入金」という勘定科目を見れば、すぐに「現金」や「借入金」の残高金額を確認することが可能になるのである<sup>11)</sup>。

しかし、総勘定元帳に間違いがあると、現金の観察者は正しい残高金額を知ることができなくなるのである。仕訳帳から総勘定元帳への転記は重要な作業であるので、次に、取引日、取引科目、取引金額が記帳された図2の仕訳帳を用いて、総勘定元帳への転記について詳しく説明することとしたい。

転記作業によって、図2の仕訳帳の「日付」欄に記帳された取引日の9月5日（\*2を参照）、「摘要」欄の「借方に相当する欄」のカッコ書きの（仕入）と（仮払消費税）（\*3を参照）、および「借方」欄の取引金額の600,000および60,000（\*5を参照）、そして「摘要」欄の「貸方に相当する欄」にカッコ書きの（買掛金）（\*3を参照）、および「貸方」欄の取引金額の660,000（\*5を参照）が、下掲の総勘定元帳（残高式）に設けられている図3の仕入元帳、図4の仮払消費税元帳、図5の買掛金元帳へそれぞれ転記されることになる。併せて、各勘定元帳の残高金額を計算することになる。

このように、図2の仕訳帳に記帳された取引日ごとの借方側の取引科目、取引金額（\*AとBを参照）と、貸方側の取引科目、取引金額（\*Cを参照）とを、図3の総勘定元帳に「転記」すること、転記された各科目の「残高金額の計算」を行うことが、総勘定元帳の役割である<sup>12)</sup>。この簿記独自の分類方法に基づく総勘定元帳への「転記」と、総勘定元帳による「残高金額の計算」の仕方とについて、さらに詳しく説明することとしたい。

2. 主要簿としての総勘定元帳の様式

総勘定元帳には残高式と標準式とがある<sup>13)</sup>。図2の仕訳帳に記帳された仕訳を、残高式の総勘定元帳に転記すると下掲の図3、図4、図5の総勘定元帳のようになる。

総勘定元帳(残高式) * 1							
図3		仕 入					40
* 2	* 3	* 4	* 5	* 5	* 6	* 7	
令和3年	摘 要	仕丁	借 方(+)	貸 方(-)	借/貸	残 高	
9	5	買掛金	9	600,000		借	600,000
		*ア					

  

図4 仮払消費税							
令和3年		摘 要	仕丁	借 方	貸 方	借/貸	残高
9	5	買掛金	9	60,000		借	60,000
		*イ					

  

図5 買掛金							
令和3年		摘 要	仕丁	借 方	貸 方	借/貸	残高
9	5	諸口	9		660,000	貸	660,000
		*ウ					

残高式の総勘定元帳の仕入元帳(図3)を見ると、取引日を記帳するための\*2の「日付」欄、取引科目を記帳するための\*3の「摘要」欄、取引金額を記帳するための\*5の「借方」欄および「貸方」欄が設けられていることがわかる。残高式の総勘定元帳では、借方金額(正数)の方が多い場合は「借方残高」といい、「借/貸」(「借または貸」と表示することもある。以下同じ)の欄に「借」と記帳する。貸方金額(負数)の方が多い場合は「貸方残高」といい、「借/貸」の欄に「貸」と記帳する(いずれも\*6を参照)。もし、残高がゼロの時は「—」と記帳する<sup>14)</sup>。 先ず、残高式の総勘定元帳の様式から説明する。

ア：残高式の総勘定元帳の様式

- \* 1 総勘定元帳 ⇒ 残高式の総勘定元帳の右上には勘定科目の番号又は頁数を記帳する。  
例示では、図3の仕入元帳の右上に40と記帳されている。図4の仮払消費税元帳の右上には28と、図5の買掛金元帳の右上には30とそれぞれ記帳されている。
- \* 2 日付欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の「日付」欄には、取引の発生月と発生日を記帳する。例示の図3の仕入元帳の「日付」欄では、9月5日と記入されている(\*2を参照)。  
なお、取引の発生月は各頁の1行目だけに記入し、以後は発生日だけを記入する。
- \* 3 摘要欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の「摘要」欄には、図2の仕訳帳の「摘要」欄(\*3を参照)の中央より左側の「借方に相当する欄」に記帳されている科目の相手科目を記入する。そこで、例示の図2の仕訳帳の9月5日を見ると、仕訳帳の「摘要」欄(\*3を参照)の中央より左側の「借方に相当する欄」には(仕入)と(仮払消費税)とカッコ書きで記帳されていることがわかる。そして、同時に仕訳帳の「摘要」欄(\*3を参照)の中央より右側の「貸方に相当する欄」には(買掛金)とカッコ書きで記帳されていることがわかる。

*2		*3			*4	*5		*5		
令和3年		摘要			元丁	借方	貸方			
9	5	諸口								
		(仕入)			40	600,000				*A
		(仮払消費税)			28	60,000				*B
		(買掛金)			30		660,000			*C
		中村茶舗より仕入れ(税抜経理方式)								*D

次に、図2の仕訳帳の「摘要」欄の「借方に相当する欄」のカッコ書きの（仕入）および「借方」欄の取引金額600,000、同じくカッコ書きの（仮払消費税）および「借方」欄の金額60,000、そして、「摘要」欄の「貸方に相当する欄」のカッコ書きの（買掛金）および取引金額660,000を、それぞれ図3の仕入元帳、図4の仮払消費税元帳、図5の買掛金元帳へそれぞれ転記する。

この場合に、図3の仕入元帳の「摘要」欄（仕入元帳の\*3を参照）と、図4の仮払消費税元帳の「摘要」欄（仕入元帳の\*3を参照）には、図2の仕訳帳の「摘要」欄（仕訳帳の\*3を参照）に記帳されている借方科目の「仕入および仮払消費税」の相手科目である「買掛金」を転記する点に留意をすること。下掲の転記後の図3仕入元帳の「摘要」欄の\*アと、図4仮払消費税元帳の「摘要」欄の\*イとに仕入および仮払消費税の相手科目である「買掛金」が記帳されているのを確認されたい。

総勘定元帳(残高式)*1							
*2		*3	*4	*5	*5	*6	*7
令和3年	摘要	仕丁	借方(+)	貸方(-)	借/貸	残高	
9	5	買掛金	9	600,000	借	600,000	
		*ア				*①	

図4 仮払消費税 28							
*2	*3	*4	*5	*5	*6	*7	
令和3年	摘要	仕丁	借方	貸方	借/貸	残高	
9	5	買掛金	9	60,000	借	60,000	
		*イ				*②	

図5 買掛金 30							
*2	*3	*4	*5	*5	*6	*7	
令和3年	摘要	仕丁	借方	貸方	借/貸	残高	
9	5	諸口	9	660,000	貸	660,000	
		*ウ				*③	

他方、図5の買掛金元帳の「摘要」欄（\*3を参照）には、図2の仕訳帳の「摘要」欄（仕訳帳の\*3を参照）に記帳されている貸方科目の「買掛金」の相手科目である「仕入と仮払消費税」を転記する点に留意をすること。転記後の買掛金元帳の「摘要」欄の\*ウには、仕入と仮払消費税が記帳されることになる。

ただし、買掛金の相手科目が二つ以上（仕入と仮払消費税）あるときは、買掛金の相手科目の仕入と仮払消費税を記帳するのではなく、仕入と仮払消費税を一括して「諸口」と記帳することになっていることに留意をすること。よって、転記後の買掛金元帳の「摘要」欄（\*3を参照）に

は図5のように「諸口」と記帳する<sup>15)</sup>(買掛金元帳の\*ウを参照)。

- \* 4 仕丁欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の「仕丁」欄(\*4)には、仕訳帳の頁数を記帳する。よって、例示のように図2の仕訳帳の9頁という数字を、図3の仕入元帳の\*4の「仕丁」欄、図4の仮払消費税元帳の\*4の「仕丁」欄、図5の買掛金元帳の\*4の「仕丁」欄へそれぞれ9と転記する。
- \* 5 借方欄・貸方欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の\*5の「借方」欄には、図2の仕訳帳の\*5の「借方」欄に記帳されている取引金額を転記する。そして、総勘定元帳の\*5の「貸方」欄には、仕訳帳の\*5の「貸方」欄に記帳されている取引金額を転記する。

よって、例示のように図2の仕訳帳の\*5の「借方」欄に記帳されている仕入の金額600,000(仕訳帳の\*5と\*Aを参照)を、図3の仕入元帳の\*5の「借方」欄へ600,000と転記する。同時に、図2の仕訳帳の\*5の「借方」欄に記帳されている仮払消費税の金額60,000(仕訳帳の\*5と\*Bを参照)を、図3の仮払消費税元帳の\*5の「借方」欄へ60,000と転記する。

他方、図2の仕訳帳の\*5の「貸方」欄に記帳されている買掛金の金額660,000(仕訳帳の\*5と\*Cを参照)を、図3の買掛金元帳の\*5の「貸方」欄へ660,000と転記する。

- \* 6 借/貸欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の「借/貸欄」は、総勘定元帳の借方金額の方が多い場合は「借方残高」といい、「借/貸」欄に「借」と記帳する。そして、貸方金額の方が多い場合は「貸方残高」といい、「借/貸」欄に「貸」と記帳する。残高がゼロの時は「—」と記帳する。なお、同一日に2つ以上の取引を同一頁に記帳するとき、または、同一列に同一文字や同一の数字を記帳する時は「ク(デイトー)」という記号を記帳する<sup>16)</sup>。

よって、例示のように図3の仕入元帳の\*5は「借方」欄に600,000と記帳されており、図4の仮払消費税元帳の\*5も「借方」欄に60,000と記帳されているので、ともに\*6の「借/貸」欄には「借」と記帳する。他方、図5の買掛金元帳の\*5は「貸方」欄に660,000と記帳されているので、\*6の「借/貸」欄には「貸」と記帳する。

- \* 7 残高欄 ⇒ 残高式の総勘定元帳の「残高」欄には、借方金額と貸方金額との差額(これを貸借差額という)を記帳する。例示の図3の仕入元帳(40)の貸借差額は600,000であるから、\*7の「残高」欄には600,000と記帳する(\*①を参照)。図4の仮払消費税元帳の貸借差額は60,000であるから、\*7の「残高」欄には60,000と記帳する(\*②を参照)。図5の買掛金元帳の貸借差額は660,000であるから、\*7の「残高」欄には660,000と記帳する(\*③を参照)。

上掲図3、4、5のように、残高式の総勘定元帳は取引日ごとに残高金額が明示されるので、便利であり経営実務で広く利用されている。以上で仕訳帳と残高式の総勘定元帳との関係、残高式の総勘定元帳の様式、転記などについての説明を終えたので、次に、標準式の総勘定元帳を取り上げる。

## イ：標準式の総勘定元帳の様式

標準式の総勘定元帳の様式は図6、図7、図8のとおりである。

## 総勘定元帳（標準式）

図6		仕 入 *1						40
*2		*3	*4	*5	*2	*3	*4	*5
令和3年	摘要	仕丁	借方	令和2年	摘要	仕丁	貸方	
9	5	買掛金	9	600,000				
		*ア						

  

図7		*3	仮払消費税				28
令和3年	摘要	仕丁	借方	令和2年	摘要	元丁	貸方
9	5	買掛金	9	60,000			
		*イ					

  

図8		買掛金				*3	30	
令和3年	摘要	仕丁	借方	令和2年	摘要	仕丁	貸方	
				9	5	諸口	9	660,000
						*ウ		

上掲の標準式の総勘定元帳の仕入元帳にも、取引金額の正数（+）を記帳する「借方」欄と、負数（-）を記帳する「貸方」欄とが設けられている。以下、標準式の総勘定元帳の様式について説明を行う。次の\*1の元帳名から\*5の「借方」欄・「貸方」欄までの5項目の説明内容は残高式の総勘定元帳と同一であるので、この5項目の説明は省略し、\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄について説明を行うこととする。

\*1 元帳名、\*2「日付」欄、\*3「摘要」欄、\*4「仕丁」欄、\*5「借方」欄・「貸方」欄

\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄⇒図3、図4、図5の残高式の総勘定元帳では、\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄が設けられている。このうち、「借／貸」欄では、「借」または「貸」という文字表記をとおして元帳の観察者へ金銭等の残高状況が「借方残高」であるのか、「貸方残高」であるのかが可視化される。そして、「残高」欄では、金額が具体的に可視化される。

このように、図3、図4、図5では\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄が一体化する形で、日々の取引金額の残高状況を知ることのできる残高式の総勘定元帳は便利である。

これに対して、図6、図7、図8の標準式の総勘定元帳では、「借方残高」や「貸方残高」を可視化するための「借／貸」欄と「残高」欄が設けられていない。「借」や「貸」という文字表記を行うことができない、また、「残高金額」の表示がないので、元帳の観察者にとっては標準式の総勘定元帳は不便である。では、標準式の総勘定元帳では、どのようにして元帳の観察者へ「借方残高」、「貸方残高」、「残高金額」を可視化するのであろうか。

これを明らかにするために、最初に残高式の総勘定元帳への取引金額等の記帳の仕方、計算の仕方および可視化の仕方を説明する。次いで、標準式の総勘定元帳への取引金額等の記帳の仕方、

計算の仕方および可視化の仕方を説明する。このように両者を比較する方法で論じることとしたい。

#### IV 総勘定元帳による計算の特徴

簿記独自の分類方法に基づく総勘定元帳への取引金額の「記帳の仕方」の特徴と残高金額の「計算の仕方および可視化の仕方」の特徴（以下、「総勘定元帳による記帳・計算等」と表現することもある）について述べることにする。残高式の総勘定元帳への取引金額の「記帳の仕方」と標準式の総勘定元帳への取引金額の「記帳の仕方」は、ともに「借方」欄と「貸方」欄に取引金額を分類する「貸借分類（たひしゃくぶんるい）」という分類方法で記帳される点は同一である。しかし、双方は、残高金額の「計算の仕方および可視化の仕方」が異なるのである。そこで先ず、下掲図9の残高式の現金元帳を用いて、取引金額の記帳の仕方、残高金額の計算の仕方および可視化の仕方について説明する。

##### 1. 残高式の総勘定元帳による計算の特徴

図9		現金(残高式) * 1					1
* 2	* 3	* 4	* 5	* 5	* 6	* 7	
令和3年	摘要	仕丁	借方	貸方	借/貸	残高	
1	4	売 上	9	500,000		借	500,000
	7	仕 入	9		300,000	//	200,000
	10	売 上	9	200,000		//	400,000
	13	仕 入	9		100,000	//	300,000
	20	売 上	9	400,000		//	700,000
						* 8	

最初に、図9の残高式の現金元帳による取引金額の記帳・計算等に係る特徴を述べる。第一は、残高式の現金元帳では取引の発生順に「日付」欄と「摘要」欄に取引科目が取引日順に記帳される。「仕丁」欄には仕訳帳の頁数が記帳される。例示の\* 1は科目名が現金であり、現金元帳と呼称する。現金元帳の元帳番号は1番であると読み取る。\* 2の「日付」欄に1月4日、\* 3の「摘要」欄に売上与記帳され、7日は仕入と記帳されている。20日まで取引順に記帳されている。取引順に記帳することが第1の特徴である。

第二は、取引金額については\* 5の「借方」欄に正数(+)に相当する入金額を分類し記帳する。他方、\* 5の「貸方」欄に負数(-)に相当する出金額を分類し記帳する。これが「貸借分類」である。例示の1月4日は\* 5の「借方」欄に500,000が、7日は\* 5の「貸方」欄に300,000がそれぞれ分類して記帳されている。このように取引金額を借方と貸方に分類して記帳することが第2の特徴である。

第三は、取引金額に関して、総勘定元帳の借方金額(正数)の方が多い場合は借方残高といい、\* 6の「借/貸」の欄に「借」と記帳し、借方残高であることを可視化する。そして、貸方金額(負数)の方が多い場合は貸方残高といい、\* 6の「借/貸」欄に「貸」と記帳し、貸方残高であることを可視化する。残高がゼロの時は「一」と記帳し可視化する。例示では\* 6の「借/貸」欄に「借」と記帳されているので、借方残高であると読み取る。「借/貸」欄のあることが第3の特徴である。

第四は、\* 7の「残高」欄が設けられていること。この「残高」欄に残高金額を記帳するのである。

例示では\*7の「残高」欄500,000と記帳されている。「残高」欄のあることが第4の特徴である。

最後に第五は、\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄とが一体となって、取引日ごとに残高金額が可視化される。例示の\*6の「借／貸」欄に「借」と\*7の「残高」欄に500,000が記帳されているので、両者を一体化させて残高金額は借方残高で現金の残高が500,000であると読み取る。\*6の「借／貸」欄と\*7の「残高」欄を一体化させて読み取ることが第5の特徴である。

なお、同一日に2つ以上の取引を同一頁に記帳するとき、または、同一列に同一文字や同一の数字を記帳する時は「 $\times$ （デイトー）」という記号を書く。図9の\*8を参照のこと。

## 2. 標準式の総勘定元帳による計算の特徴

図10 現金(標準式)*1										
		*2	*3	*4	*5	*6	*7	*8	*9	
		令和3年	摘要	仕丁	借方	令和2年	摘要	仕丁	貸方	
*10	1	4	売 上	9	500,000	1	7	仕 入	9	300,000 *11
		10	売 上	9	200,000		13	仕 入	9	100,000
		20	売 上	9	400,000		31	残 高		700,000 *12
					1,100,000					1,100,000
					*13					*14

次いで、図10の標準式の総勘定元帳による取引金額の記帳・計算等に関する特徴を述べる。

第一は、標準式の総勘定元帳では中央から左側に取引金額の正数(+)を記帳する「借方」欄が、中央から右側には負数(-)を記帳する「貸方」欄が設けられる。これが第1の特徴である。例示の現金元帳の\*2、\*3、\*4、\*5が借方側で、\*6、\*7、\*8、\*9が貸方側である。

第二は、総勘定元帳の借方側に取引金額の正数(+)を取引日順に取引科目や取引金額を記帳し、貸方側に負数(-)を取引日順に取引科目や取引金額を記帳することが第二の特徴である。例示の現金元帳の\*2の「日付」欄に1月4日(\*10を参照)、\*3の「摘要」欄に現金元帳の相手科目の売上、\*5の「借方」欄取引金額の正数(+)の500,000が分類記帳されている。そして、\*6の「日付」欄に1月7日(\*11を参照)、\*7の「摘要」欄に現金元帳の相手科目の仕入、\*9の「貸方」欄に取引金額の負数(-)の300,000が分類記帳されている。なお、「仕丁」欄には、仕訳帳の頁数を記帳する。例示の現金元帳の\*4と\*8の「仕丁」欄には、仕訳帳の頁数である9が記帳されている。

第三は、標準式の総勘定元帳では、取引日ごとに残高金額が帳簿上で可視化されない。それで、残高金額を知りたい場合には、たとえば月次決算であれば、例示の現金元帳のように1月31日付で帳簿を締め切って残高金額700,000を可視化する(\*12を参照)。帳簿を締め切らないのであれば残高金額を知りたい時点で、貸借差額を計算し計算結果をメモ書きに書きとるしか方法はない。元帳を締めるかメモ書きで残高金額を把握することが第三の特徴である。

第四に、標準式の総勘定元帳を締め切る場合には、貸借の金額を均衡させて締め切る。例示の現金元帳では、合計金額が1,100,000で締め切られている(\*13と\*14を参照)。貸借均衡による元帳の締め切りが第四の特徴である。

標準式の総勘定元帳では、日々の取引ごとに残高金額が可視化されない点が弱点である。図10の標



## 2. 簿記の計算の最大の特徴—貸借分類—

簿記では、「借方」欄と「貸方」欄で構成される独自の帳簿を用いて計算が行われる。下掲図14のように現金であれば現金元帳の「借方」欄に「入金＝正数」だけを分類集計し、「貸方」欄に「出金＝負数」だけを分類集計して、残高が把握される。日々の取引金額のうち、「入金＝正数」は「借方」欄に分類集計し、「出金＝負数」は「貸方」欄に分類集計する。この総勘定元帳を利用した貸借分類による計算こそが、簿記の計算、つまり総勘定元帳による計算の最大の特徴である。よって、総勘定元帳の特質は貸借分類による計算を行うことにあるといえるのである。

そこで、まず「日常生活の計算」を説明し、次に、「簿記の計算」を説明し、簿記の計算の最大の特徴が「貸借分類による計算」であることを明らかにすることとしたい。

たとえば、次のように入金や出金が行われた場合、日常生活では入出金の順番に加減算を行い、残高が図13のように計算される。これは算術式計算とも呼称される。

図13 日常生活の計算算術式計算

1 / 4	入金	+ 500,000円
1 / 7	出金	- 300,000円
1 / 10	入金	+ 200,000円
1 / 13	出金	- 100,000円
1 / 20	入金	+ 400,000円
		+ 700,000円

これに対して、貸借分類を最大の特徴とする総勘定元帳による簿記の計算は「勘定式計算」とも言われるが、筆者は「貸借分類による計算」と呼称している。上記の「算術式計算」と区別される「貸借分類による計算」を総勘定元帳の一つである標準式の現金元帳で可視化すると図14のようになる(単位：円)。

図14 簿記の計算 (標準式)

借方 (+)	現金	貸方 (-)
1 / 4 売上 500,000		1 / 7 仕入 300,000
1 / 10 売上 200,000		1 / 13 仕入 100,000
1 / 20 売上 400,000		1 / 31 残高 700,000 *ア
1,100,000		1,100,000

図14の「借方」欄に入金を意味する正数 (+) だけが分類記帳されている。他方、「貸方」欄に出金を意味する負数 (-) だけが分類集計されているのが確認できる。「残高」欄を持たない標準式の総勘定元帳では、残高金額を次のように計算するのである。

図14の標準式の現金元帳では、「借方」欄においてプラス要素の入金額だけを分類集計し（1,100,000円）、もう一方の「貸方」欄においてマイナス要素の出金額を分類集計する（400,000円）。そして、元帳の左右（貸借：たいしゃく、という）の金額を見比べて、多い方の金額（1,100,000円）で貸借を均衡させる。たとえば、プラス要素の入金欄の分類集計額が1,100,000円で、マイナス要素の出金欄の分類集計額が400,000円であれば、均衡額は1,100,000円となり、この1,100,000円と400,000円との補数額700,000円が「残高」となる（\*アを参照こと）。これが元帳を利用した「勘定式」の貸借分類による計算であり、簿記の計算は正数(+)は「借方」欄に分類集計し、負数(-)は「貸方」欄に分類集計する原理であることが理解できるであろう。正数(+)は「借方」欄に分類集計し、負数(-)は「貸方」欄に分類集計する貸借分類による計算こそが、簿記の計算の最大の特徴をなしているのである。

なお、残高式の総勘定元帳は取引日ごとに残高金額が表示されるが、標準式の総勘定元帳は取引日ごとに残高金額が明示されない。このため、取引日ごとに残高金額を読み取れて便利である残高式の勘定元帳は、経営現場で広く採用されている。これに対して、標準式の総勘定元帳は、特にTフォームの略式総勘定元帳はスペースを広くとらないので、教育現場で広く採用されている。

### 3. 日常生活の計算と簿記の計算との比較

ここで、簿記の総勘定元帳を利用した貸借分類による集計（勘定式分類計算）と、日常生活の計算（算術式計算）とを対比してみると次のようになる。

日常生活の計算		簿記の計算（勘定式分類計算 単位：円）		
		借方 (+)	現 金	貸方 (-)
1 / 4	+ 500,000円			
1 / 7	- 300,000円	1 / 4 売上	500,000	1 / 7 仕入 300,000
1 / 10	+ 200,000円	1 / 10 売上	200,000	1 / 13 仕入 100,000
1 / 13	- 100,000円	1 / 20 売上	400,000	1 / 31 残高 700,000
1 / 20	+ 400,000円		<u>1,100,000</u>	<u>1,100,000</u>
	<u>+ 700,000円</u>			

日常生活の計算では現金取引が発生した順に加減されていき残高700,000円を計算する。これを「算術式計算」という。これに対して、簿記の計算では勘定元帳を利用し、正数(+)は「借方」欄に分類集計し、負数(-)は「貸方」欄に分類集計する、この「貸借分類による集計」によって、残高金額が計算される。この「貸借分類」による計算こそが、総勘定元帳を利用して行われる簿記の計算の最大の特徴である。

## むすびに

人々が日記をつける場合に日々の生活を1冊のノートなり日記帳に記録する。これと同じで、簿記でも1冊に綴られた仕訳帳に取引活動を記帳する。ビジネスの日記帳である仕訳帳には、取引日、取引金額、取引科目の3点を、取引の発生日順に歴史的事実として仕訳帳に記帳する。これが仕訳帳の役割である。しかし、この仕訳帳には計算機能がビルトインされていないのである。それで、たとえば現金の手持額が幾らあるのか、借金が幾ら残っているのかを知りたくても、仕訳帳からは知ることができないのである。

そこで、計算機能を有する総勘定元帳が考え出されたのである。仕訳帳に記帳されている取引日、取引金額、取引科目を総勘定元帳へ転記する。総勘定元帳は略して元帳といい、科目名ごとに、たとえば現金元帳、借入金元帳というように1科目名ごとに元帳がつくられる。したがって、科目名が50個あれば元帳は50個つくられる。この場合に、野球選手の氏名は背番号等を見るとわかるように、簿記でもたとえば現金元帳は1番、借入金元帳は40番というように、元帳名と番号がセットになっているのである。たとえば、番号1番の現金元帳を開けば、現金の残高を知ることができるのである。このように、科目名ごとに残高金額を正しく計算＝勘定することが、総勘定元帳の役割である。この総勘定元帳による計算の最大の特徴は、簿記独自の貸借分類という方法で行われることである。

しかし、仕訳帳から総勘定元帳へ転記する際に、転記ミス等が生じることも少なくないのである。転記ミス等が生じたら、たとえば現金元帳の観察者は現金の残高を正しく知ることができない。そこで、主要簿への記帳ミス等を防止するために、あるいは主要簿から入手できない情報を補充するために、補助記入帳や補助元帳といった補助簿が考え出されたのである。この補助簿の役割については次稿で取り上げることとし、本稿はこれで筆を擱くこととする。広くご批判を賜れば幸いである。

## 注

- 1) 中村 忠 (1985) 『現代簿記』白桃書房、2頁において、損益計算(成果管理)に関して「営業活動の結果として半年なり1年の間にどれだけの経費がかかり、どれだけの利益をあげたかを計算することができる。これを知るとは商人(経営者―石内挿入)にとって非常に大切である」と述べている。
- 2) 同上書2頁において、財産計算(財産管理)に関して「営業規模が大きくなって従業員を使うようになると、現金や商品などについて、その出し入れを記録しておかないと、間違いや不正を生ずるおそれがある」と述べている。  
岩田 巖 (1955) 「二つの簿記学：決算中心の簿記と会計管理のための簿記学」『産業経理』第15巻第6、11頁においても「毎日々々の日常的な管理の機能を果たすためにやっている」と述べ、帳簿を日常から記帳することによって、経営を管理することの重要性を強調している。
- 3) 醍醐 聰 (2015). 『簿記』, 東京法令出版, 35頁、63頁。安藤英義 (2019). 『新簿記』, 実教出版, 43頁。
- 4) 醍醐 聰、同上書、33頁において「仕訳帳は、取引を発生順に記入するので、経営活動の歴史的な記録を取る重要な役割をもっている」と述べている。そして続けて「また、仕訳帳から各勘定口座に転記がおこなわれるので、勘定口座への記入もれや誤りをふせぎ、記録の正確性を保つことになる」と述べ、記帳ミスや不正を防止する役割も果たすとしている。  
安藤英義、同上書、43頁において「仕訳帳は経営活動の歴史的な記録を残す帳簿として、重要な役割をもっている」と述べている。そして続けて「さらに、この帳簿から総勘定元帳に転記が行われるので、取引と総勘定元帳をつなぐ役割も果たしている」と述べている。

- 5) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,一橋出版,24頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,24頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,34頁。
- 6) 中村 忠 (1989). 同上書,29頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,33頁。安藤英義 (2019). 『新簿記』,45頁。
- 7) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,15頁。
- 8) 安藤英義 (2019). 『新簿記』,43頁において「すべての勘定口座を集めた帳簿を総勘定元帳または短く略して元帳という」とされている。
- 9) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,29頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,45頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,45頁。
- 10) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,24頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,31頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,39頁。  
醍醐 聰 (2015). 『簿記』,33頁において「仕訳帳から各勘定口座に転記がおこなわれるので、勘定口座への記入もれや誤りをふせぎ、記録の正確性を保つことになる」と述べているように、転記の際に記帳ミスや不正の防止に留意する必要がある。
- 11) 醍醐 聰 (2015). 『簿記』,35頁において「総勘定元帳は、損益計算書や貸借対照表の作成資料となるので、仕訳帳とともに簿記のしくみのなかで、最も重要な帳簿である」と述べている。  
総勘定元帳に間違いがあると、たとえば、現金の観察者は正しい金額残高を知ることができなくなる。それで、仕訳帳から総勘定元帳への転記ミスや不正を防止するための補助簿が導入されるようになったのである。補助簿については、他日に取り上げる。
- 12) 本稿では主要簿としての総勘定元帳に紙幅を多く充てることとする。
- 13) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,15頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,21頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,29-30頁。
- 14) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,31頁。安藤英義 (2019). 『新簿記』,48頁。
- 15) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,30頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,35頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,45頁。
- 16) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,28-31頁。
- 17) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,16頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,21頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,30頁。
- 18) 中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,17頁。醍醐 聰 (2015). 『簿記』,22頁。  
安藤英義 (2019). 『新簿記』,31頁。

#### 文献一覧

- 安藤英義 (2019). 『新簿記』,実教出版  
岩田 巖 (1955). 「二つの簿記学 : 決算中心の簿記と会計管理のための簿記学」,産業経理.  
醍醐 聰 (2015). 『簿記』,東京法令出版.  
中村 忠 (1985). 『現代簿記』,白桃書房.  
中村 忠 (1989). 『最新簿記会計 I』,一橋出版.